

益田 PLUS 景観

Masuda PLUS+ Keikan



【向横田町にて】

平成 23 年度益田市景観ワークショップ第 1 回の様子

CONTENTS

【特集】農村の風景を訪ねて

平成 23 年度益田市景観ワークショップ p. 2

生活に根付いた里山景観 p. 3

景観を支える人たち p. 4

*真砂の自然を守る会

*NPO法人アンダンテ 21

実りの秋を迎え、益田の山々も色づいてきました。

「益田+景観」秋号では、「平成 23 年度景観ワークショップ第 1 回」を特集！第 1 回は、10 月の西益田地区へ農村景観を訪ねました。

【生活に根付いた里山景観】では、農村景観、里山景観の見所ポイントを掲載しています。

【景観を支える人たち】では、真砂の自然を守る会、NPO法人アンダンテ 21 を取材し、「人」と「地域の資源」を繋ぐ活動について伺いました！

今が見ごろの農村景観の魅力が“ギュッ”と詰まった一冊をお楽しみください。

（**ますだ**
景観）
きんだい

この情報誌は近畿大学建築学部都市計画研究室が作成しています。平成 21 年度から大阪の学生が益田を訪れていますが、益田の人々にとって当たり前風景も、近畿大学の学生である私たちにとっては、特別な素晴らしい風景なのです。益田景観に対して取り組みを行なう市民の方々や、私たちがこれまでに取り組んできた活動の紹介、益田で感じた魅力を情報誌に収めています。

【特集】農村の風景を訪ねて

平成二十三年度益田市景観ワークショップ

第一回は、自然豊かな農村風景が広がる西益田地区を対象に開催しました。当日は、すっきりしない空模様で秋晴れの風景は見られませんでした。自然の香りを感じながらじっくりまちを歩き、益田の農村景観の魅力を見つけることができました。

まちを歩く

「風景を切り取る」という、普段とは違った視点を持ってまちを歩き、班ごとに美しい風景や残したい風景を探しました。写真額縁を使って、その風景が魅力的に写るように構図を考え、カメラで撮影していきます。蔵に描かれた鏝絵や軒先に吊るされたタマネギなど、何気ない風景を写真に収め、そういった光景が農村風景の良さであることを、参加された全員が実感しました。



大きな額縁を用いた写真撮影



グループディスカッション

マップづくり

まち歩きで撮った写真を模造紙上に貼り付けながら、感じた魅力に参加者それぞれが付箋に書きだします。その意見を基に、西益田地区にはどういった風景があるのかを整理し、この地区に残したい風景を記したマップを作成。マップにタイトルをつけて、グループディスカッションは終了しました。最後に出来上がったマップをそれぞれで発表し、地域の魅力をみんなで再発見することができました。

ワークショップを終えて

みなさんにとっては当たり前だと思える風景も、ゆっくりと歩きながら眺めてみると、「農村を感じさせる風景」、「集落内を流れる水の風景」、「鏝絵に見られる職人技」など、新しい魅力に気づくことが出来ます。今回参加された方々は、じっくりとまちを歩き、みんなで話し合ったことで、自分だけでは気づかない「何気ない風景の中にある魅力」を見つけることができたのではないのでしょうか。

皆さんも、少し視点を変えて日常風景を見直し、地域独自の風景を探してみたいはいかがでしょうか。



感じた魅力を発表する参加者たち

第1回益田市景観ワークショップ
日時：平成23年10月23日（日）
参加者：21名（+学生10名）
会場：西益田地区振興センター

ワークショップの流れ

開会・ガイダンス

↓
まち歩き

↓
グループディスカッション

↓
全体発表

↓
今日のふりかえり

農村景観
の特徴って
何だろう？

生活に根付いた里山景観



1

農村の生活は自然の中にあります。自然と共に生きてきた人々の知恵がその地域の生活を支え、それがその地の景観を創り上げます。益田市にも数多くの山村・農村が存在し、場所ごとに違った表情を見せてくれます。変化の激しい自然の中で、変わらず在り続ける里山の景観とはどのようなものか、今一度考えてみませんか。

暮らしと

共にある風景

独特の赤い色を持つ石州瓦は豪雪地帯に適したものです。赤屋根の群れが山の緑に染えている風景には、訪れるたびに心奪われてしまいます。赤瓦だけでなく、田んぼや畑があり、生活の営みが近くにあることで生まれる景観も農村景観の特徴です。また、集落に張り巡らされた水路、重厚感のある蔵なども独特の景観を作り上げています。



2



3



4

移ろいゆく自然

季節ごとに様相が移ろう景色は、里山の醍醐味です。それは天気や時間によっても変化します。朝の霞がかかった様子、昼の澄み切った空。普段は穏やかな川が、雨上がりには激しく流れていく様子。移りゆく自然の景色が里山の景観の背景となっています。

- 1 農村の風景（澄川）
山や田んぼと民家が織りなす景色
- 2 汲地（澄川）
野菜を洗う習慣を活かした河川整備
- 3 蔵（向横田）
点々とある蔵が、集落の中に際立っている
- 4 赤瓦の民家（中垣内）
益田の集落でよく見られる石州瓦を使った民家

平成 23 年度

第 1 回益田市景観ワークショップ

西益田地区（向横田町）周辺の 景観要素



水路

高津川から畑へ引かれた水路が家の裏に流れる。



蔵

存在感のある土蔵と蔵ごとに違うこて絵。



自然

高津川と山が織りなす雄大な景観。川での釣りなど、そこで人が行う行動も景観の一部となる。

昔からの農道や生活道を感じさせる曲がりくねった道。この道沿いに建物が並ぶことで農村の道の景観が形作られる。

赤瓦



2



1

①それぞれの家で、色や形に違いがある赤瓦。道沿いの風景に変化を与えている。

②田んぼと山々、赤瓦が連なる美しい遠景。個々の瓦に違いはあるが、それらが連なることで一体となった景観を創り出す。

生活

- ①各家の畑も景観の一部になっている。
- ②日々の信仰の場となる祠。ゆったりとした農村風景の中で、空間を引き締めている。
- ③収穫された玉ねぎが吊るされた何気ない景観。
- ④庭の柿の実り。季節観のある景観をつくり出す重要な要素。



1 2
3 4

路地



季節

美しき里山に

住みし人を

「真砂人」という

真砂の自然を守る会

真砂地区振興センター センター長 大庭完さん
有限会社「真砂」代表取締役 岩井賢朗さん

真砂は実り豊かな田畑と命育む清流、自然豊かな山々が織りなす素晴らしい農村風景が広がる自然豊かな地域です。真砂中学校の校内には、昔からソメイヨシノが植えられており、春には、多くの人の目を惹きつけてきました。桜の木は維持管理が非常に難しく、苔が生えたり、風通しが悪くなるとすぐに枯れてしまいます。真砂では桜を守るため、昔から地域の中学生や住民たちが有志で集まり、苔落としなどの桜の管理を楽しみながら行っています。この活動の継続により、真砂の桜は美しさを保っています。毎年開花時期に催される桜祭りも、今年で32回目を迎えました。このような活動やイベントを続けてきた過程で、地域住民が一体となったのはもちろんですが、地域外の人も多く訪れる

真砂では地域に新しい何かを加えるのではなく、本来ある魅力を磨いています。その過程で、住民全体が地域の資源をしっかりと認識しています。自然や建造物なども重要な風景のひとつですが、それらをよりよくしようと活動している人たちの動きも大切な風景の一つではないでしょうか。



雄大な山々や心を落ち着かせる川。田舎の良さが詰まった真砂地区の風景。



満開の桜が真砂の風景を彩る。

景観を支える人たち

豊かな景観は、それらをより良くしていこうと考え、行動に移している人たちによって支えられています。益田では様々な団体がそれぞれの思い、目的で景観まちづくり活動を行っています。

高津川と

人を繋ぐ

NPO法人アンダンテ21

アンダンテ21代表 廣兼 義明さん



夏に開催される「川ガキ講座」。子どもたちは流れに身を任せ「川流れ」や、飛び込みなどを体験する。

NPO法人アンダンテ21は、川周辺での活動を通して、子どもを含めた周囲の大人にも、自然環境について考えてもらうきっかけを作るために、日々活動しています。

毎年夏に、高津川大学（高津川流域ネットワーク会議）が主催する「川ガキ講座」では、子ども達が川流れ、飛び込みなどを体験します。自然に触れ、その中でしか味わえない楽しさを子ども達に伝えるとともに、親世代にも川の重要性や魅力を知ってもらう機会となり、これをきっかけに、親世代が川で遊ぶという企画も出てきました。

高津川の清流は水質日本一で知られておらず、水質の低下により、日本一の座も譲ることになりました。アンダンテ21では、もう一度日本一を取り戻すべく、川の水質調査をはじめとした様々な活動を行ってきました。川を守るためには、山の状態が良好でなければなりません。そのため、森の健康診断を行う

と共に、小学校で間伐の必要性をレクチャーしたり、小学生と一緒にどんぐりを植樹する活動を行いました。また、高津川下流の海では、川の水質に大きな影響を受けるハマグリ稚貝調査を続け、今年で3年目を迎えています。

こうした活動を通して、近年川の重要性がようやく周辺の人達にも認知されてきました。水質調査の結果も年々向上し、昨年度は水質日本一に返り咲きました。今後も、様々な団体と役割分担をしながら活動を発展させていこうと考えています。

高津川は、益田の地域共有の財産です。川は周辺にある様々なものとの関係の中で美しさを保っています。何か一つでも変化すると損なわれてしまう、非常に尊いものなのです。景観がつくられるサイクルを理解し感じることで、それをみんなで共有すること、そして私たちが変化を敏感に感じ取ることが、川という重要な景観要素を守っていく第一歩になります。

次回の益田景観

次回の冬号では、日本海の漁業と結びつきながら独自の文化やまちなみが育まれてきた漁村地域を特集。11月に開催予定の景観まちづくりワークショップについての記事と併せて掲載します。



(発行)

益田市建設部都市デザイン課
〒689-8650 島根県益田市常盤町 1-1
TEL: 0856-31-0351
FAX: 0856-31-1480
<http://www.city.masuda.lg.jp>

(制作)

近畿大学 都市計画研究室
〒577-8502 大阪府東大阪市小若江 3-4-1
<http://urbankindai.blog84.fc2.com/>